オルタナ１７号 (2/2)

左から、高橋 遼、川崎 洋、蚊野詞旭

国道から診療所まで40分かかっていたところが10分に短縮された

います。参加者には感想を言ってもらい、カンボジア支援に対するモチベーションが上がるように努めています。この10分間のカンボジア・スピーチをとても大切にしていますね。

――先輩の活動を引き継いでいますが、その前から途上国支援に興味があったのでしょうか。

川崎　僕は、漠然と何か熱いことをしたいと思っていて、入学したばかりの頃、グラフィスに所属することを決めました。

でも、実は、もともとボランティアにもカンボジアにも興味がなかったのです。1年の夏にスタディツアーに行ってから、考えが変わりました。ボランティアと聞くと、助ける、与えるといったイメージが強いのですが、僕は逆に与えてもらったことの方が多かった。カンボジアのためにしたことが自分のためにもなっている実感があって、09年のスタディツアー後に代表を務めることになったのです。スタディーツアーには、1人当たり約15万円（1週間滞在）で参加できます。

高橋　僕は09年2月に入ったのですが、大学に入る時からボランティアや国際支援に興味があり、友人からグラフィスを紹介されました。ギャル男風の派手な印象だったのですが、ミーティングも真面目にしていて、そのギャップも良かった。

09年夏に初めてスタディーツアーに参加し、実際にカンボジアの貧困を目の当たりにすると、マイナスだけじゃない、今後発展する可能性も感じられました。そこで、「学生でも支援できることがあるのでは」と思うようになりました。

カンボジアの子どもたちは勉強したくてもできない。夢に向かって努力することが難しい。生まれた場所が違うだけで叶わない夢がある。生まれた場所で決まる運命なんて受け入れたくない。何かしたいと思えたんですね。

蚊野　僕は浪人時代、テレビ番組の「情熱大陸」でマザーハウス代表の山口絵理子さんを見て、自分も何か人の役に立つ仕事がしたいと思いました。大学に入って遊んでいても何か楽しくないなと思っていたら、『僕たちは世界を変えることができない。』（パレード）という本で石松さんを知り、ミーティングに参加することにしました。08年9月にグラフィスに入り、09年3月には診療所の開院式に行ったんです。

途上国の人にただ薬を与えるだけでは意味がない。時計がないという以前に時間の感覚がない、字も読めないから飲み方もわからない。だから、病院では、数字を教え、時間の感覚を身に付けさせ、最後にアラームを付けた時計を渡すなど生活リズムを指導するところから始めました。

――今後の活動はどのように展開されますか。

川崎　クラブイベントでは、毎回、一千人近くの学生を動員し、純利益の目標値１００万円を達成しています。これに石松の本の印税と地元のＮＧＯ団体の支援で、学校や診療所が維持できています。今後も様々な形態のチャリティーイベントを開催し、カンボジア支援をしていきます。

蚊野　クラブイベントだけだと、「本当にボランティアしているかわからない」と感じて辞めてしまう子もいるので、もったいないとも思っています。

カンボジア支援をしている意識をみんなにを持ってほしいので、自分は新たに、フリーマーケットやチャリティTシャツプロジェクトなどサブプロジェクトを作り、もっと活動の幅を広げていきたいです。

生まれた場所が違うだけで夢が持てない――高橋
現地での体験談をもっと知ってほしい――蚊野

■この続きは、オルタナのウェブサイト http://www.alterna.co.jp に掲載いたします。